

覚書

満州佐伯村おぼえ書 九

ハ第十次佐伯開拓団小史

会員 矢野徳弥

五、勤労奉仕隊の作業

昭和十八年に入ると、日本内地の食糧事情は急速に悪化し、これが増産確保のため、満州に派遣される勤労奉仕隊も一段と増勢され、佐伯村の地区にも二回におおむね合計七十七名の青年男女が派遣された。

このうち、第一次の奉仕隊に加わって、その隊長を勤めた高野梅治(中野村)現在本直村教育委員)の手許に、『勤務日誌』の一部が残されている。

この日誌は、たんに奉仕隊員の作業記録にとどまらず、当時の開拓地における団員達の、日常生活の様子よく記されており、非常に貴重な資料である。

以下、この日誌に頼りながら、入植三年目の開拓地の日常を追ってみよう。

なお、記述の内容は、日誌の原本そのままではなく、筆者の責任で、抄出、または要約したことを、予めお断りしておく。

現地入りまで

第一次の奉仕隊は、母村七分村の青年男女五十名(うち女子十二名)で編成され、大鶴村開拓団に向かう八名

とともに、三月三十一日七分を出発、四月四日現地入りしている。このときの引率は、県経済生課主事の緒方佳文(野津原町)現在所談会議長)であった。

高野日記は、往路について主要駅の通過時刻が克明に記されているが、母村と開拓村の時間的距離を示すものとして興味深い。

三、三一	一四、四〇	大分駅発
	一九、二五	下関駅着
	二一、三〇	下関港水港
四、一	六、〇七	釜山港入港
	八、一〇	釜山駅発
	一九、二〇	京城通過
四、二	一、三〇	平壤通過
	七、一六	安東駅(税関)
	一五、五五	奉天駅着
	一七、五七	奉天駅発
	二一、一七	昌圖駅着下車

下車した夜は、駅前の日本人旅館に、辞事処に宿泊。

翌三日は雨のため出発出来ず、更に一日。

四日、八時二十五分、全員徒歩で出発、一時間と要し昌圖県城に入り、これより女子は馬車に乗る。男子は二十六キロ歩いたところで、団の荷馬車(大轎)に迎えられ、十八時二十分団本部に到着。

家録の教えるとおり、どう急いでみては、母村と現地の往來には、片道四日が必要であった。

初期の作業

○到着した翌五日、新築成ったばかりの国民学校で入団式。

○六日は休養、その夜降雪があり、更に二日休む。

最初の一週間は、雑多な作業がつづいた。

○九日、種籾七十八俵をこん包し、浸漬準備。

○十日、暖かくなる。昼間十八度。高粱の株を掘り取る。(三所五段) 燃料用である。

○十一日、三度。報徳班は薪運搬。勤労、分度班は厩肥の糞出し。推讓班(女子)は野菜畑の作業。

○十二日、風強く小雪、朝マイナス六度、昼五度。学校の奉仕。開拓道路から校門までの登校路、中八M、長さ百五十M。両側の排水路中一M、深さ〇、六Mの工事、泣き出す女子あり。午後二時半終了。

○十三日、朝マイナス二度、野菜畑の耕起。

○十四日、朝二度、昼十八度、本部前の開拓道路四十M延長、非常に重労働。曾根田義夫(直見村)病臥。

○十五日、初めての公休。ただし早朝一時間自給菜園の播種。ほうれん草、ふだん草。二十日大根、春播きねぎ。

○十六日、水田地区に宿舍を移動すべく、下調査にゆく。本日、病氣一名、作業三十三名。馬匹受領十一名、炊事四名。

○十七日、朝マイナス二度。水田地区に春野菜を播く。五時半作業終了。本部まで一時間二十分を要す。甲斐文字発病。馬匹受領の隊員帰る。

○四月の後半に入ると開田作業が始まり、労働が強化されて、病人が急増する。朝の気温は二〜三度、昼間の温

度は十八度前後といった日が続く。

○十八日、水田の畦畔造り開始。西瓜・南瓜を二反半播く。硫安一俵使用。女子三名病氣。

○十九日、畦畔造り。十名病氣、竹田直枝(切畑)は高熱。

○二十日、畦畔造り三所歩。團長督励に来る。

○二十一日、畦畔造り六所歩。團長滞在。

○二十二日、畦畔造り病氣五名。

○二十三日、畦畔造り病氣七名。夜間州日報の記者来り、座談会。

○二十四日、水路の両側に植樹(いたちばぎ)、病氣十二名。

○二十五日、前日に続き植樹。

○二十六日、畦畔造り、病氣十名。

○二十七日、畦畔造り、病氣十二名。

○二十八日、畦畔造り、病氣七名。

○二十九日、食前作業一時間、そのあと、天長節拝賀式。病氣七名。

○三十日、本部求剣の土手に白樺の植樹。別の組は、ま

く木を植える。病氣九名。

○四月の後半に入ると病人が続出し、隊員の健康管理が

制約とされはじめた。突如、ついに犠牲者を出すに至

った。明治村出身の隊員太田久人が、二十九日夕刻、突

然げしい下痢と高熱におかされ、及びなく意識不明に

おちいて、五月一日早朝死亡したのである。医師はい

たものの、当地の開拓地の医療水準では救えなかった。

痛恨の極みという外はない。

○五月一日、曇り。午前四時、班長坂 要君より、太田

君の容態急変を知らされ、直ちに隊員宿舎にゆく。五

時三十五分、遂に帰らず、十八歳を一期に、満州の野

○五月一日、曇り。午前四時、班長坂 要君より、太田

君の容態急変を知らされ、直ちに隊員宿舎にゆく。五

時三十五分、遂に帰らず、十八歳を一期に、満州の野

○五月一日、曇り。午前四時、班長坂 要君より、太田

君の容態急変を知らされ、直ちに隊員宿舎にゆく。五

時三十五分、遂に帰らず、十八歳を一期に、満州の野

開田作業

最初の犠牲者

に散る。直ちに全員で葬儀準備。  
午後三時、團と合同で葬儀。夕刻火葬をす。

後には、隊員であった人の話によると、その頃、僧侶がいなかったので、(近藤映麿の入団は、この後となる)因尾村瑞祥寺の小僧であった稗田恵に経を唱導させ、多少心得のある人達がこれに和して、丁重に、その靈を弔ったという。

このあと、太田の死と悼むかの如く雨が降り続き、五日まで上らず、隊員達は久しぶりに休養をとることができた。

九日には、同族の父と明治村長を迎え、国民学校で告別式を行ない、十一日、改めて昌國県葬を受けることになった。

○十日 晴。遺骨を抱いて昌國に向かう。「太田君よ、たつたこれだけ七の姿になったのか」と涙止まらず。

午後二時、公署着。秋身寮に遺骨安置。多数の在留日本人が通夜に来る。柳井室教君と泊まる。

○十一日 正午団長がくる。一時四十五分車の迎えがきて公会堂の式場にゆく。花輪十村、吊辞を捧げる者十一名。式はすゝめめで厳肅、かつ盛大に執行される。それにしては、一奉仕隊の死を、県葬までして弔ってくれるとは……。

○十二日 午前四時五十六分の列車にて、遺骨、内地に帰る。

若くして異郷に斃れた少年の死は、じつのように盛大な葬儀をもってしても、償われることのあるまい。しかし、この県葬については、後にいろいろと反省がある。

後任者である開拓民とは異なり、奉仕隊員は、友邦日本が満州國に、建設援助のため派遣してくれた戦士であった。だから、その任務途中の死を、県葬でもって厚く弔うとしても、特に不恩讒ではなかつた。ただその論理が、県長を始めとする現地人に察して理解できるものであつたかどうか。

(このときの県長は、日本の救難と同時に土匪に走り、やがて広陵開拓團を襲うことになる) 戦時中、日本内地に強制的に送られ、労役に服した中国人は四万人を越えたといわれ、多数の犠牲者を出していたが、葬儀を許される例は殆んどなかつたという。

### 水田作業開始

太田の死を長く悼む余裕もなく、団全体は農耕の季節に突入した。隊員たちは、これまで片道六キロの道を歩いて農場に通っていたが、五月九日日本部の宿舎を出て、水田地帯の真中にある新築部落跡に引越した。これとともに日課も、起床午前五時、作業開始午前六時三十分、作業終了午後六時と改められた。

隊長が帰散したのは十六日であつたが、留守中は水口作雄(四鹿)班長が、すべてをとりしきっていた。

○十六日 晴。馬がいらないので、鎌で耕す。この大耕地を thoughts. 昼休みは鏡をもって雑草を追ったが失敗。

夕方、遠くの方角が真白に降ってきたので、作業止めた。ところどころがこれが有名な黄塵であつた。夜は灯りのない小屋に北庭(上野・ラッパン)と寝る。

○十七日 曇。一時雨。五又は一枚の圃場(一反七畝)の耕起を受け持たせる。

○十八日 晴。殿にて水田耕起、方かたが腰が痛い。本日第二次奉仕隊入団。

この日入団した第二次奉仕隊は、母村以外の南郷各所村から参加したものを含め、二十四名(女子六名を含む)で編成され、隊長は川野一馬(中野村、前年度も参加)であった。一行は、第一次の西方一寺の地点に入社し、第一次とは別個に水田耕作を行なへた。

○十九日 晴。水田耕起、主水路の橋架け、午後二時より、第二次の入団式。

○二十日 晴。鮮張水田跡を測量(三町三反五畝) 団長、金田指導員、隊に來泊。

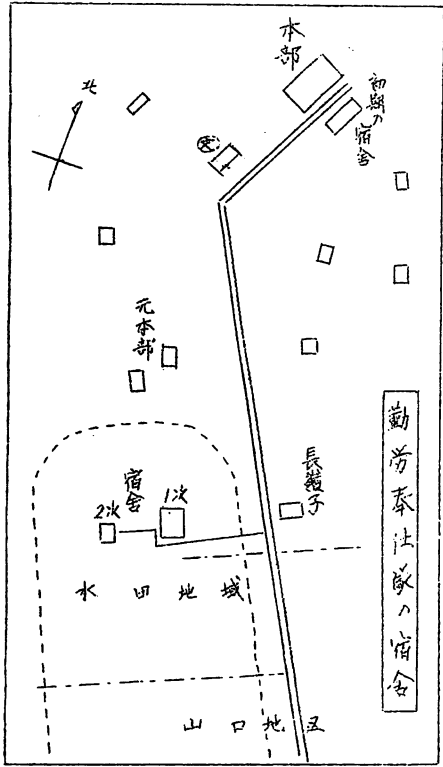
○二十一日 晴。水田耕起。団長が来てゐるせいにか、皆よく働く。しかし五十町歩といえど大したものだ。相当努力が必要。午後七時作業終了。それでも日没まで二時間ある。(東京標準時を使ってゐた。

○二十二日 晴。水田耕起。

○二十三日 晴。水田耕起。

○二十四日 曇。水田耕起。

○二十五日 晴。隊員二十五名を山口のト部まで橋張装の受領に派遣する。午後五時耕地の測量



○二十六日 晴。食前作業三十分。体菜とほうれん草を播く。

本日は郭牛園の学校跡(種子倉庫)に種籾の選別にゆく。キヨウソコ五十俵、北海二十五俵。米当は朝倉でしまい、田の岩本保蔵さん宅で昼食をいただく。

帰りに太平山で敵の子三匹を二十一円で購入。

○二十七日 晴後曇り。水田耕起。

○二十八日 雨。公休とする。

蛙鳴き 今日も故郷の空恋し

水をめぐる争い  
清州の夏は短かい。そのため水稻の梅穫の遅れが一番心配される。播種には水が必要である。奉仕隊は団とは別の経営であったため、競争意識もあって、その働きぶりを見張るものがあつた。しかし、水は三湖拓団の間で公平な配分とする約束があり、あせる隊員達の要望どおりには行かなかつた。

○二十九日 晴。本日より水と入れ、代掻きの出来るよう指導員に要求するも、許しが出ず。本部に行き、団長と掛け合うつもりでいたら、本人がやってきた。説得されて断念する。レンタイ(品屋を二十俵浸水。

○三十日 晴。本日から整地開始(水が入る)。暑い。レンタイ十六俵浸水。

○三十一日 晴。風強く寒し。

種は播きだし指導員は来ず。播種器の部品は揃わず。代掻きの河野高義君は病氣、漸くの応援は多数来たが、フオオが不足。何たる腹の立つ日か!

午後は時間給水となる。それでも水を入れていたら、山口開拓団から止められる。

空り鎮に郵便物受領に出した御手洗鹿太郎と、高橋誠

の二名が夜に有るも帰隊せず。七名づつ二組の捜索隊を出す。山口の駐在所で、二人が現地人とけんかして宝ヶ嶺警察署に拘置されたと聞く。疲れた体で一時過ぎに帰隊。たまたま末洵中の山岸県副拓股長と、金田指導員がもらいさげに、午前三時出發する。

○六月一日 晴。今日から時開給水だ。昨夜の疲れも忘れ一生懸命手配。

午後二人の隊員帰る。水路にセキをしているのを金田指導員に発見され制止される。隊員非常に怒る。レンダイト十九俵浸水。

ところで、この宝ヶ嶺事件の後味は、決して良いものではなかった。

後日、團長は近かつたある隊員の話によれば、事件は、副員の一人が中国人街で、金を支払うことなく品物を持ち去ろうとして起きたもので、同行の二人は巻き添えを食って、一しよに拘置されたらしい。しかし問題は解決の仕方、この夜警察を誘った山岸股長は、現地人の警察署長に会うやいきなりうちめし、理由の如何を問わず日本人を捕えたことの不当をなじり、その釈放を強制したという。署長が、この屈辱は、深く涙をみんだこと以て想像に難くない。

○二日 曇後雨。午前中稲播き。キョウソ十俵浸水。

○三日 雨後晴。雨は上らず心はあせる。休みにして隊員に急走しようとして、使いを部落に決したら、指導員に制止される。

午後になり晴れ、点播器を用い播種。

○四日 晴。男子は芽の決すぎた種を撒播。女子は普通どおり点播。

○五日 晴。水ひき、代掻き、播種と各班とも大張り切り。

り。本日が最高潮。キョウソ十二俵浸水、本日までレントイト十五俵を播く。

○六日 晴。第三水路に水を入れる。点播。

○七日 晴。水は最後尾まで行ったが、まだ不十分。

○八日 晴。三号地、四号地播種終了。水引きをやめまく言ったら、少しは増える。

隊員連に、もう二三日気合いを入れねばならぬ。

○九日 晴。無風。内地より暑い。残りの地に播種。

○十日 晴。夜、こっそり水を入れようと、土崎金治へ上野と最と二人で出向いたが、山口の連中に発見されて果さず。

○十一日 晴。一号地、二号地、宿舎の裏、すべて終る。

○十二日 晴。みんまの努力の甲斐あり、午前中ですべてを終る。

午後には農具の整理。水いび水廻り。午後三時より休む。ほつと息をつく。これほど大きな仕事を、こんな早くと終るとは、いい。

○十三日 晴。品文保衛(中野村) 羽柴 壽(中野村) 土崎金治(上野村) 麻生正夫(副長村) 大石發美(副長村) の諸君と水廻り。

第一次のみで、四十五町歩の田植終了。

○十四日 晴。疲れもいえぬが、本郷の相作業奉仕、おかの植付け。

農林省から、隊員一人当り一町歩のそばを作れという長文の電報がくる。

○十五日 晴。待っていた休んだが、團の高入團員の田植への意欲はいく。

午後作付完了祝賀会、白耐と船み、せんざいとすすり、文さわぎ、いまままでの苦勞もすっかり忘れる。

○十六日 晴。全員休む。木口班長(副隊長)と二人で水

まわり。朝開けた水門がもう締められている。又開ける。

一番先に播いた大稻は、二寸五分から三寸になつて居る。焼しい。午後三時、柳井久傳(中野村)市原福太郎(川原本村)西園貞定にて「古そうになる」。

夕方、竹田道枝(切畑村)甲斐文子(直見村)御手荒仲枝(川原本村)の諸氏が迎えにくる。

帰りに水門を見ると、又開けられて居る。

○十七日 晴。本朝にて高野繁、甲斐博志の両氏が会う。帰りに渡辺繁重君宅による。宮下典辰(直見)より、山口と水がつかしたと伝えてくる。

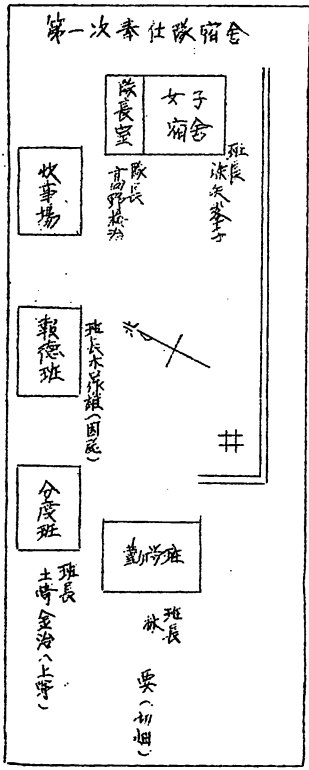
○十八日 晴。除草を始める。夕方水番にゆく。

○十九日 晴。夕文あり。水口君と不察芽を調べて廻る。

○二十日 日曜日 晴。昨夜水下痢、指揮を水口君に任せ。皆心配するので、午後は絶食のまま除草に出る。四時歩終了。

○二十一日 晴。午前中の作業に、休憩をよえなかつたといつて、各班長から苦情が出る。

それにしては、当時の、佐伯地方の青年達の勤勉ぶりには、ただただ敬服の外はない。(つづく)



記録

わがふるさと、元田誌、(一) 一 名所と旧跡

会員 市野瀬 仁

○ 神武さん(丸山)

さきに「祭りと」とのところで述べたように、元田の象徴は、神武さんである。村の人々は、ことさらにこの山に愛情を注いでいるようでもないが、よそから帰って来ると、慈母のようなやさしい姿をしたこの山が目につく。自然と落付いてくるのである。

山麓には四十戸の部落を抱え、頂上に神武天皇をお祭りしていることもあって、元田の部落氏にとっては大切な山、名所として一番先に挙げたいのである。

○ 荒木の古い墓池

神武さん(丸山)の西の麓が荒木といふところだ、ここに元田部落として最も古い墓群がある。二二基、横三基の広さに過ぎない墓池であるが、五輪塔二基、板碑五基、その他小塔群が、朽木立の中だけ散在している。

これらは、今から四百年前の室町時代頃のものであるから、佐伯、高海部郡地方は、とくべつ珍らしい。井戸川の川上流の方から流れても、宇藤木・川中・田の平・備後・畑・小野等に、この時代の塔が見られる。ただこの墓地の特色が、他と違っている点は、庄屋の祖先と深い関係があることである。